

『危機』書における「生活世界の存在論」について¹

山口弘多郎²

はじめに

本稿の主題となる「生活世界の存在論」は、エドムント・フッサールの晩年を代表する著作『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』書と略記）の中で、はじめて提示されたものである。

まずこの著作の成立について確認をしておきたい。

フッサールは、1935年5月7日と10日、ウィーン文化連盟という団体の依頼をうけて「ヨーロッパの人間性の危機における哲学」という講演を行った。また同年11月「人間悟性研究のためのプラハ哲学サークル」という団体から招待されて、プラハのドイツ系大学とチェコ系大学で、「ヨーロッパ的学問の危機における心理学」という講演を行っている。

『危機』書とは、この二つの講演、主にプラハ講演、を敷衍して書かれたもので、翌年36年、アルトゥール・リーベルト主宰の雑誌『フィロソフィア』にその第1部と第2部が掲載された。続いて第3部が掲載される予定であったが、フッサールの最期まで掲載されることはなく、『危機』書は未完に終わった。

その後1954年、第3部はフッサール全集第6巻の中に収められた。この巻には、他にもウィーン講演の内容や、『危機』書に関連する草稿も収められている。この公刊によって、『危機』書の研究が本格的に始まった。

当初から研究は「生活世界」という概念に集中した。その中にはフッサールの超越論的主観性から生活世界への転回という問題があった。これは、生活世界という概念が『危機』書の中ではじめて扱われたものであり、さらには全集第6巻に収められた草稿に「学としての哲学、厳密な学としての哲学、この夢からはもうさめてしまった」(VI, 508)³というフッサールの証言があったことから、生じてきた問題で

1. 本稿は2012年3月、第10回フッサール研究会における発表原稿を改稿したものである。なお改稿に際し、アドバイザーとして、立命館大学の谷徹教授から貴重なご指摘を頂いた。記して感謝の意を表したい。

2. 大阪大学大学院

3. フッサール全集 (Husserliana) からの引用は慣例にしたがい、本文中括弧内に巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で表記した。ただし各巻の编者による序論からの引用については、巻数を表すローマ数字の後に、ページ数を表すローマ数字をページの略号とと

ある。

この問題についてはすでに解決がなされている。夢から覚めたのは、フッサールではなく、当時の人々であり、彼は超越論的主観性の現象学を諦めたわけではない。この解決によって、後の研究は、生活世界と超越論的主観性の関係へと向けられていく。

そうした経緯から、フッサールが『危機』書の中で提示した生活世界の学「生活世界の存在論」という問題も、超越論的主観性の現象学との関連の中で扱われるようになり、逆に、ヨーロッパ諸学つまり基礎づけられる側の学問と生活世界の関係はあまり問われなくなった。

本稿は、そこに光を当てたい。

そこでフッサール全集第 29 巻に収められた草稿を用いる。この巻は、ラインホルト・N・スミットを編者として、1993 年に公刊された。ここには 1934 年から 37 年の『危機』書関連草稿が、4 部構成で収められている。その中で用いたいのは、第 2 部の第 11 草稿である。これは、編者によって「生活世界の存在論と具体的諸学 『危機』の第 1 草稿の最終部分」という題が与えられたもので、1935 年 12 月に書かれた。つまりプラハ講演が行われた翌月に書かれたものである。

第 29 巻の中で、「生活世界の存在論」が題としてつけられている草稿は、この第 11 草稿のみである。また書かれたのが『フィロソフィア』掲載前なので、この草稿が『危機』書の本文となった可能性もあり、そのため『危機』書の全体を教えてくれる草稿として期待できるため、ここではこの第 11 草稿を中心に扱っていきたい。

本稿は、そうすることで「生活世界の存在論」の目的、つまり現象学のプログラム内における位置付けを明らかにする。これまで「生活世界の存在論」は、「超越論的現象学への手引き」として位置づけられてきた。しかしフッサール全集第 29 巻に収められた草稿を紐解くと、「生活世界の存在論」には「手引き」とは異なる位置付けもあることがわかった。そのことを示したい。

というのも、このようにヨーロッパ諸学と超越論的現象学との間に「生活世界の存在論」を置き、諸学と存在論の関係を問うことで、フッサールが『危機』書の中で構想していた現象学のプログラムの新しい側面を示せると期待できるからである。

本稿は、以下の手順で進める。まず『危機』書における議論と第 11 草稿における議論を、「理念化」に焦点をあてて、見ていく (1)、次に、諸学との関連させる形で「生活世界」概念を取り上げ (2)、そこから「生活世界の存在論」の課題を明確にする (3)。その上で「生活世界の存在論」を位置づけ (4)、最後に、この存在論の構想が『危機』書の全体構想にどう関わるのかを示す (5)。

もに表記した。

1. 理念化

『危機』書において、フッサールは二つの仕方で生活世界概念を導入している。一つは自然科学批判からの導入、もう一つがカント批判からの導入である。本稿では、第 11 草稿と対比しながら『危機』書の議論を見ていくため、自然科学からの導入を取り上げていく。それが本節である。

『危機』書の第 9 節とその前後の節が、自然科学を主題としている。その内容は、主に自然科学の発生論である。技術から科学がどのように発生し、どのように科学が生活世界を隠蔽するようになったのか、そのプロセスがガリレイの名の下に描写されている。

ここで言われている自然科学は、「数学的自然科学 (mathematische Naturwissenschaft)」を指す。ここには主に物理学と、それを支える数学や幾何学などが含まれている。『危機』書が発表された 1936 年では、すでにアインシュタインの相対性理論やプランクの量子論が登場しており、物理学内で大きな変革が起こっていた。しかし、フッサールは「物理学がニュートンによって代表されようが、あるいはプランクやアインシュタインや、その他未来の何びとによって代表されようが、物理学はいぜんとして精密科学であったし、またそうありつづけるであろう」(VI, 2) と述べており、現代物理学と古典物理学を区別せず、「精密科学 (exakte Wissenschaft)」として等しく扱う。

フッサールはまずガリレイ以前へと遡り、ガリレイに伝統として与えられていた幾何学が測定術 (Messkunst) から誕生する場面を描写する。

ここでの測定術は、「ある経験的な基本形態を、実際、普通に扱うことのできる経験的な物体を具体的に固定し、それを尺度として選び出し、ほかの物体の形態とのあいだに存在する (あるいは発見される) 関係によって、このほかの形態に、間主観的かつ実践的で一義的な規定を与えうるという可能性を、実践的に発見する」(VI, 25) というものである。例えば、紐を尺度として選び、その長さで土地の広さを測り、それによって、土地の広さに関する大勢で共有できる規定を作り出すことなどが挙げられる。

こうした技術は、フッサールが「人類とともに、技術はたえず進歩し、技術的に精練されたものに対する関心もまた進歩する。こうして完全性の理想は、いつも繰り返し先へと伸びていく」(VI, 23) と述べているように、尺度を変え、単位を変え、基準を変えて、たえず発展していく。

幾何学が誕生するのは、こうした実践の中である。

「この完全化という実践から出発して、『いつも繰り返し (immer wieder)』という仕方で、考えうるかぎりの完全化の地平へと自由に進む中で、いたるところに極限形態 (Limes-Gestalt) が予示され、決して到達されることのない不変の極 (Pol) と

してのそれへと向かって、そのつどの完全化の系列が伸びてゆく」(VI, 23) のだが、この極限形態へと関心を向けたとき、それが幾何学誕生の場面である。

再び土地の測量を例にするならば、繰り返し土地を測る中で、より完全な測定を行うため、尺度が精錬されていく。こうした技術の進歩が「完全化」であるが、その過程で「直線」や「四角形」といった尺度や土地の「極限形態」が示されてくる。たえず実践の中で測定者が用いるのは、そのときそのときの尺度であり、彼が向き合うのは、そのつどそのつどの土地である。しかし、その実践的関心を理論的関心へと転換させ、尺度や土地ではなく「直線」や「四角形」と向き合うようになった場合、その測定者は幾何学者となる。

こうして測定術から幾何学が誕生してくる。こうした点から「測定術は、普遍的な幾何学 (universelle Geometrie) と、その純粋な極限形態の『世界』との開拓者になる」(VI, 25)。

ガリレイ以前の伝統的な幾何学が描写された次に、ガリレイが行った数学的自然科学の構想が分析される。フッサールは、ガリレイの構想を「物体の内容的充実 (Fülle) の間接的数学化」と捉えた。

ガリレイの数学的自然科学は、物体を形態と感性的性質に分ける。この感性的性質は内容的充実 (Fülle) と同じことを指している。この区別は、ジョン・ロックの一次性質と二次性質と近いものである。形態の数学化が直接的数学化と言われ、それに対応して感性的性質の数学化が間接的数学化と言われる。つまり感性的性質に関しては直接的数学化が行われない。というのも「われわれは、二重の世界の普遍形式を持つのではなく、ただ一つのそれを持つのであり、また二重の幾何学を持つのではなく、一つの幾何学を持つのであり、形態の幾何学を持つだけで、内容的充実についての第二の幾何学を持つわけではない」(VI, 33) からである。

感性的充実は、「本質的にそれに属している形態とまったく特殊な仕方では規則的に関係づけられる」(VI, 33) という意味で、間接的に数学化される。例えば温度を水銀柱の水銀の動きで測る、といった場合や、弦の長さで音の高さを変えるといった場合である。

ガリレイは実際に、その関係を「公式 (Formel)」として発見した。

ここには、「幾何学の算術化」という結果が含まれている。これは、ガリレイの行った数学化が「公式」を伴った数学化であり、大きさや長さなどの数値を測るだけの数学化ではなかったということの意味する。「測定すれば測定値としての数が与えられるが、測定量の関数的な従属関係についての普遍的命題においては、特定の数ではなく、数一般が与えられ、しかもそれが、関数的従属関係の法則を表現する普遍的命題において言い表されるのである」(VI, 43)。ここで言われている「数一般」は、現代の公式で言えば「X」や「Y」といった記号を指しており、「普遍的命題に

において言い表される」とは、代数的に表記されることを指している。

この公式の発見によって、自然科学の仕事はもっぱら更なる公式の発見に集中することになる。というのも「一度、公式を手に入れば、それによって、具体的、現実的な生活の直観的世界（中略）において、経験的確實さをもって期待されるものを、実践的に望ましい仕方で、あらかじめ予見できるようになる」（VI, 43）からである。先に、フッサールは現代物理学と古典物理学を区別しなかったと述べたが、それは「古い物理学であろうと新しい物理学であろうと、そのすべての発見は、いわば自然に従属する公式の世界における発見」（VI, 48）だからである。

公式を用いた計算によって、ある出来事を予見できるようになる。例えば、天文学の計算が日食や月食の日時を予想し、それが的中するといった場合があるだろう。ここで注目すべきことは、その公式の的中性の高さである。数学的自然科学が大きく成功した要因の一つがここにあるわけだが、フッサールはまさにここを問題視する。彼は「公式の世界」や「自然科学の真理」などを「ぴったり合った理念の衣（*wohlpassendes Ideenkleid*）」と呼び、「この理念の衣は、一つの方法にすぎないものを真の存在だとわれわれに思い込ませる」（VI, 52）と述べて、公式の世界が真の存在であることを否定し、この世界はあくまでも「生活世界の代理をしている」（VI, 52）にすぎないことを強調する。

フッサールが指摘するこうした錯誤は、ガリレイが『偽金鑑識官』で述べた「哲学は、眼のまえにたえず開かれているこの最も巨大な書の中に、書かれているのです。[中略] その書は数学の言語で書かれており、その文字は三角形、円その他の幾何学図形であって、これらの手段がなければ、人間の力では、そのことばを理解できないのです」⁴という言葉によく表れている。

このようにフッサールは、ガリレイの仕事を分析した。彼はガリレイを「近代の偉大な発見者たちの頂点」（VI, 53）に置く一方で、直観的な世界つまり生活世界を理念の衣によって覆ってしまったことをうけて「発見する天才であると同時に隠蔽する天才でもある」（VI, 53）と評価した。

以上が『危機』書における自然科学批判である。第9節の中には、半ば突然な形で「生活世界」という概念が登場する。従来ならば、この生活世界を検討するために『危機』書の第34節とその前後の節へと議論は進められるのだが、本稿ではそれを次節に任せて、ここでは第11草稿における理念化の議論を見ていきたい。

第11草稿は編者によって5つの節に分けられている。その第1節に「生活世界の存在論と2種類の理念化」という題が与えられている。この「2種類の理念化」が、まさに『危機』書にはなかった論点になる。

フッサールは「われわれ現代人が『世界』という言葉を使用する（また学問的な

4. ガリレオ著、山田慶兒、谷泰訳『偽金鑑識官』中央公論社、2009年、57頁

構築を押しつけない) 限り、すでに最初の理念化がわれわれの背後にある」(XXIX, 140) と述べる。彼の中では「構築 (Konstruktion)」は「構成 (Konstitution)」と区別され、否定的な意味で用いられ、数学的な自然科学が行うことを指す。その構築を押し付ける以前に最初の理念化が入り込んでいると述べているので、『危機』書で述べられた理念化に先立つものがあることを、この箇所は証言している。

彼は、古代ギリシャ人の世界を引き合いに出すことで、この理念化を説明している。古代ギリシャ人には、ペラス (限定) とアペイロン (非限定) という語で表現される違いがあった。前者は形態をもつもの。これは、われわれが見たり触れたり動かしたりすることができるもので、つまり事物を意味する。他方、後者は「形態のないもの (Gestaltlose)」。例えば大地や空、海や時間空間のことで、事物として決して経験されないものを意味する。

彼によれば、この区別が以下の二つによって取り払われる。それは能力と経験である。能力とは、われわれが持つ能力、つまり「われわれに方向づけられた直観的な事物世界においてあちこちへと動く」(XXIX, 141) ことができるというものである。経験とは、「われわれはなお繰り返し事物と出会うだろう」(XXIX, 141) という経験可能性のことを指す。この二つによって「古代ギリシャ人にとってペラスという実際に直観的で有限な周囲世界が、『無限に』拡張されるようになった」(XXIX, 141)。

ここでは、この「最初の理念化」を「無限化」と呼び、『危機』書における理念化を「数学化」と呼ぶことで区別したい。そうすると理念化とは、無限化と数学化という二段階で遂行される作業になる。無限化そのものは、学問的な構築を押し付ける以前のものなので、問題視されていない。つまりフッサールが問題視していた理念化を、より詳細にするなら、数学化になる。したがって本稿では今後、理念化について述べる際は、数学化としての理念化に限定したい。

この理念化によって構築される世界は、『危機』書が論じた自然科学の公式の世界と同じものである。第 11 草稿では、「空間時間という普遍的な形式において構造的にまったく均一に形成された無限の事物世界」と表現されている。ここで注意したいことは「均一に (homogen)」という点である。というのも、ここに理念化の特徴があると思われるからである。このことを掘り下げるために、第 11 草稿から別の理念化に関する箇所を引用したい。それは「具体的な学の主題としての正常な (normal) な人間」という題の第 5 節にある。題が表しているように、理念化を主題とした節ではない。ただここでは「生物学 (Biologie)」を軸として具体的なものと抽象的なものが対比されているので、まったく理念化と関係ないわけではない。ここでは「抽象化 (Abstraktion)」という表現で、このように言われている。「われわれが主観を捨象するなら、抽象的なものとして純粋な物体が残る。しかし物理的な物体ではなく、石のような具体的な物体である。物理的に理念化され理論化されたものが残るため

には、そこから石の具体化は捨象されなければならない」(XXIX,158)。

ここでは、主観的なものの捨象と具体的なものの捨象という 2 種類の捨象が述べられている。後者の例であれば「人間」であっても「パソコン」や「木」といった具体的なものでも、「50 kg」「17 kg」「200 kg」として量的に置き換えられることによって事物間の質的な差異は捨象され、すべてが均一に扱われるようになる。

以上のように、第 11 草稿における理念化の議論からは、それによって事物の質的差異が失われ、均一化されてしまうといった事態が生じることが言えるだろう。

本節では、『危機』書と第 11 草稿における理念化について見てきた。これを通じて導入される生活世界について、次節で見ていきたい。

2. 生活世界

本節では、『危機』書の第 34 節の議論を中心に、主に諸学と生活世界の関係に焦点を当てたい。そして必要に応じて第 11 草稿の議論を用いる。

諸学と生活世界の関係を述べた箇所として次のような証言がある。

「学が、問いを提出したり答えたりするとき、それらの問いは最初から、また当然その後も、このあらかじめ与えられてある世界——まさしくその中でこの問いやその他の生の実践が行われる——を基盤とし、その存立に依拠している問いである」(VI,124)

この「あらかじめ与えられてある世界」が「生活世界」を指している。そこから生活世界は前学問的な世界として特徴づけられる。そしてどの学も、この世界に関する問題を設定し、その問題を解決しているのである。自然科学も同様である。

さらに次のような証言もある

「もろもろの学は、生活世界から、自己のそのつどの目的にとってそのつど必要なものをとりだして利用しながら、生活世界の自明性の上に立てられている。しかし生活世界をこのように使用するという事は、生活世界をその固有の在り方において、学的に認識するという事ではない」(VI,128)

このことについてフッサールは、二つの具体例をあげている。その例は、学が生活世界の自明性の上に立てられているという点と、研究に必要となるものに対しては学的に認識しようとしていないという点を共に満たす例である。

一つは、「アインシュタインは、マイケルソンの実験と他の研究者による追試とを利用したり、マイケルソンのものの模写である装置を使ったり、それに従属する計測や合致点の確認などを用いている」(VI, 128) という例である。現在のアインシュタイン研究には、彼は相対性理論を構築する際、マイケルソンの実験から、一般に

言われているほど影響をうけていなかったとする意見もある⁵。しかし、ここではそうした事実が問題になっているのではない。アインシュタインの研究には、マイケルソンの実験であれ他の者の研究であれ、先行するものがあり、それらがアインシュタインの研究の前提となっている。そしてアインシュタインは、マイケルソンの実験や他の先行研究を学的に認識しようとしなかった。そこが問題になっている。

もう一つは「見られている計量器や目盛りなどは、現実存在するものとして使用されているのであり、決して幻覚として使用されているわけではない。それゆえ、妥当するものとして現実に生活世界的に存在しているものが、一つの前提となっているのである」(VI, 129) という例である。前の例が先行研究といった文化的な例であるのに対して、こちらの例は知覚的な例として挙げられている。実験を行う際に用いられる実験器具に対してまで、科学者たちは理論的な関心を向けていない。そのような器具は確かにあるものとして自明視されているのである。

以上のような仕方ですと生活世界との関係が考えられている。フッサールはこのように考えていたので、自然科学批判から生活世界概念を導入するという議論の仕方を選択したのである。第9節では、隠蔽されたという点に重点が置かれたが、第34節では自然科学と生活世界が対照的に述べられている。その最も主要な対照が、生活世界は直観可能で、理念的世界は直観不可能という点である。フッサールにとって理念的な世界は、「作られた世界」であり、「真の存在」ではないのである。というのも我々は直観的な生活世界で「幾何学的に理念的なものを決して見出さない、つまりさまざまな形を持った幾何学的な空間や数学的な時間を見出すことは決してない」(VI, 50) からである。

第11草稿には、この考えを単刀直入に表現した箇所がある。

「生活世界は、その相対性とそのつど性 (*Jeweiligkeit*) の変化において一つの現実的に存在する世界として妥当している、唯一の真の世界である」(XXIX, 140)。ただしここで注意しなければならないのは「真 (*whar*)」の意味である。自然科学における「真」は、誰に対しても無条件に妥当する普遍的な真理という意味であるが、この場合、「真の存在とは、ドクサのうちにあっては問われることなく『自明的』とされているもの」(VI, 11) という意味になる。

このように生活世界が自然科学との関連において考えられている間は、生活世界が学を支えているという点は明確となっても、生活世界そのものが問題とはならない。フッサールは生活世界の問題を、自然科学の部分問題から、哲学的な問題へと昇華させて、生活世界を学的主題とする生活世界の学について議論を始める。その中で提示されるのが「生活世界の存在論」である。

5. 板垣良一「アインシュタインとマイケルソンの実験 京都帝国大学演説をめぐって」『科学史研究』38, 173-177頁 (日本科学史学会, 1999)

3. 生活世界の存在論

本稿の主旨は、「生活世界の存在論」と学の間を問うことにあるが、本節ではそのためにまずこの存在論の内実について考えたい。前節で生活世界が自然科学に対してもつ関係について見てきたが、本節ではこのことについてもう少し触れた上で、存在論を見ていく。

生活世界に重点を置いて、自然科学と生活世界の関係を考えた場合、前節のような内容が見えてきた。では自然科学に重点を置いて、その関係を考えた場合どのようになるのか。それを次の引用から考えたい。

「まさにこの世界とそこで生じるすべてのものは、科学やその他の目的にとっての必要に応じて使用されるのだが、『客観的真理』へ向かう主題的態度のうちにあるすべての自然科学者にとっては、この世界は『単に主観的 - 相対的』という刻印を捺されている」(VI, 128-129)。

この引用の「この世界」は生活世界を指している。前半の部分は、前節で見た内容を指している。後半が、自然科学者から見た生活世界の特徴である。例えば温泉に入った場合、その熱さをどう判断するのかは、判断者によって異なる、つまり温泉に入るときの状況や判断者の経験に対して相対的である。

科学者たちは、「この『主観的 - 相対的なもの』は『克服』されねばならないとされている」(VI, 129) ので、その温度を数字で表そうとする。そうすることで、その温度の熱さは、誰にとっても同じものになる。それが 43 度なら、43 度と規定される。そうすることが「克服」になるのである。自然科学者たちが自身たちの発見した理念的なものを真の存在だとする考えは、こうしたところから生じてくる。

しかしフッサールは、この主観的で相対的な生活世界に対して非相対的な構造を認める。「この生活世界は、あらゆる相対性の内でも、その普遍的な構造 (*allgemeine Struktur*) を持っている」「すべての相対的存在者 (*Seiende*) が結び付けられている、この普遍的な構造は、それ自身相対的ではない」(VI, 142)。

この「普遍 (*allgemein*)」は自然科学の「普遍 (*universal*)」と異なる。第 11 草稿の中に「我々に対して調和的に妥当する世界は、相対性というヘラクレイトス的な流の中で、やはり不変的な構造を保持している」(XXIX, 140) とあることから、この「普遍 (*allgemein*)」は「不変 (*invariant*)」という意味だと言えるだろう。

「生活世界の存在論」は、この不変的な構造を問うのである。『危機』書の中で、唯一、この存在論を主題的に扱っている第 51 節にそのことが述べられている。

「生活世界は、いかに変移し、また訂正されようとも、本質法則的な類型を固守している」。そして「この本質類型は (中略)、経験の世界としての生活世界 (つまり、現実的で可能的な経験の直観において、統一的に、一貫して調和的な直観の世界) の存在論という固有な学の主題となりうるだろう」。また「自然的態度で、生活

世界の不変の構造 (lebensweltlich invariante Struktur) を問うことができる」(VI, 176)。

これらの引用から「生活世界の存在論」の内実はより明確になるだろう。この存在論は、生活世界の不変的な構造を問うもので、その構造は類型的な構造である。存在論自体は、超越論的な課題ではないため、自然的態度においても行うことができる。

この生活世界の不変的な構造には生活世界の存在者が結び付けられているので、フッサールは「生活世界の存在論」を「この存在者 (Onta) の具体的に普遍的な本質学」(VI, 145) と表現している。以上のことをまとめると「生活世界の存在論」とは、存在者が結びついている不変の類型的構造を解明するものであると言えるだろう。

4. 生活世界の存在論の目的

「生活世界の存在論」の内実を確認したので、本節では現象学のプログラムにおけるこの存在論の目的について考察していきたい。そのためにまず『危機』書の危機論を確認する。というのも「生活世界の存在論」が『危機』書で提示されたものである以上、その目的には「危機の克服」という性格があるはずだからである。危機の内実を確認することが、目的の概略を掴むことになる。

『危機』書の第2節の題が「学の理念から単なる事実学⁶への実証主義的還元。生への意義の喪失としての学の『危機』」(VI, 5) であるように、学の危機は、学が生に対する意義を喪失したと、さしあたり理解できる。

「喪失 (Verlust)」とは「持っていたものを失う」という意味である。つまり生に対する意義を持っていた時代が、学にはある。フッサールが考えるその時代は、ルネサンスである。彼はルネサンスの哲学の中に、古代ギリシャから受け継がれた哲学の理念を見て取る。それは「あらゆるものを包括する学問、つまり存在者全体の学」(VI, 6) という意味の理念である。「複数形で表せる学問はすべて、ただ一つの哲学の非自立的な分枝である」(VI, 6) と述べているように、かつての諸学は哲学の下で統一していたのである。彼は、その哲学を「普遍的哲学 (universale Philosophie)」と表現している。

その諸学が生に対する意義を失ったのは、本稿第1節で見てきたように、自然科

6. 「学問的客観的真理は、物理世界や精神世界のような世界が、事実上、何であるのかを確定することである」(VI, 4) とフッサールは、事実学の真理について述べている。そして、「私たちの生存の困窮において、この学は私たちに何も語ってくれない」(VI, 4) と批判している。ここで彼は「人間の存在全体に意味はあるのかないのか」(VI, 4) といった理性の問題について語るべきと考えているのである。つまり世界を事実的に確定することのみに従事し、理性の問題を放置する学が事実学と言われている。

学の成功があったためである。フッサールの表現を用いれば「実証主義は、哲学の頭を切り落とした」(VI,7) ののである。このために諸学は統一性を失い、事実学として分かれてしまう。したがって『危機』書における危機には、「学の統一性の喪失」という側面があると言えるだろう。

危機の内実の一部を確認したので、次に「生活世界の存在論」の目的について考えたい。第 11 草稿で「世界のあらゆる学問にとっての基礎学問は『生活世界の存在論』である」(XXIX, 140) と述べられている。まずは、この意味について考えたい。

フッサールは諸学と「生活世界の存在論」の関係を、物理学と数学と比べながら述べる。

「数学は、そのつどの発展の段階の中で物理学者にとって、ただの器具ではなく方法である」(XXIX, 146) したがって「あらゆる物理学は、まったく応用された数学である」(XXIX, 146)。そうした上で、次のように続ける。「理想的に言えば、具体的な学問とそこに属する具体的な存在論の事情も似ているのではないか」(XXIX, 146)。

ここから、学問にとって「生活世界の存在論」とは方法であり、そのため学問とは、応用的な「生活世界の存在論」とであると言えるだろう。第 11 草稿の別の箇所に「物理学のように、具体的な学問は、あらゆるその学問的な（もっと拡張した意味における精密な学問的な）方法の器具として存在論すなわち具体的な世界の普遍的な学問を指導に持つこと、それをわれわれは期待する」(XXIX, 147) とあることから、そのように言えるのではないだろうか。

ではその「導き (Leitung)」とは何であろうか。

「具体的で直観的な世界は具体的なもののその領域的な本質類型をもつ」(XXIX, 146)。

と述べられている。その例として「生物と無生物」という区別が挙げられている。そして、この本質類型が「そのアプリアリの下で、一般的に導きを持つだけではなく、具体的なものの不変の領域的な構造のうちに指導を持つ」と言われている。その最初の導きとして「学の区分」が挙げられている。したがって、「導き」とは、学問の区分を導くという仕方での指導であると言えるだろう。

このことを『危機』書の証言で補強したい。

第 66 節の中で、生活世界の本質類型に関する議論が行われている。ここでは「事物はそれぞれその具体的な類型性を持っており、それぞれの言語の『名詞』に鑄造される」(VI, 230) と言われている。例えば事物は「椅子」や「石」や「パソコン」といった具体的な類型を持っている。このような「あらゆる個別類型は、あらゆる最も一般的な類型、つまり『領域的』類型から広がっている」(VI,230)。ここでも、領域的類型の例として「生物と無生物」の区別が用いられている。そして「根源的経

験の世界としての生活世界のこうした最も一般的な区別や分類が、学問的な分野の区別に対して規定的である」(VI, 230)。と述べられている。こうした議論は、第11草稿と重なるものであろう。

以上のことを踏まえると、「生活世界の存在論」が「学問の統一性の回復」という目的を持っていることが言えるだろう。その回復の仕方は、生活世界の不変的な類型構造が学問をそれぞれの分野へと分けていき、他方、学問が「生活世界の存在論」から分化された応用的な「生活世界の存在論」として統一的な意味を持つ、という仕方である。

5. 学問と存在論

フッサールは、『イデー I』の「事実と本質」という章の中で、学問と存在論の関係について述べている。そこでは、前節に出てきた「領域 (Region)」という概念が用いられている。

「どの具体的な経験の対象も、その質料的な本質によって、ある最上位の質料的類 (Gattung) に、つまり経験的对象のある『領域』に、組み入れられる」(III/1,23)。そして「その純粋な領域的本質には、領域的な形相学あるいは領域的存在論と呼べるものが対応する」(III/1, 23)。さらに「あらゆる事実学 (経験科学) は、本質的な理論的基礎を、形相的な存在論の内に持つ」(III/1, 23)。その例として「すべての自然科学的な学科は、物理的な自然一般についての形相学 (自然の存在論) が対応する」(III/1, 24)。フッサールは「領域」の例として「自然」や「精神」などを挙げており、それぞれの領域的存在論が『イデー II』において試みられている。

以上のような議論は、『危機』書における「生活世界の存在論」と重なる面がある。他方で重ならない面があり、その面が「学問の統一性の回復」という目的に関わっている。

フッサールにおいて「領域」は複数形で表すことが可能な概念である。実際に「自然」と「精神」などの例をあげている。それに応じて領域的存在論が試みられるので、自動的に領域的存在論も複数形で表すことができる。

しかし生活世界は、本質的には、唯一の世界である。フッサールは世界と事物とのあり方の違いについて、こう述べている。「世界は、一つの存在者、一個の客観のように存在するのではなく、複数が無意味であるような唯一性 (Einzigkeit) において、存在する」(VI, 146)。生活世界が唯一の世界であるからこそ、この世界に問いを向ける学問が統一性を回復することができるのである。つまり「領域」と「生活世界」は、前者が複数であり後者が本質的には唯一という点で、重ならないのであ

る⁷。

『危機』書には、フイックが残した続稿の構想がある。それによると『危機』書は5部構成の予定だった。第4部と第5部は題のみが残されている。その第4部の題は「すべての学問を超越論的哲学の統一のうちに取り戻すという理念」とある。そのテキストが残されていない以上、その内容は推測の域を出ないが、少なくともフッサールがヨーロッパ諸学を哲学の下で再び一つにしようと考えていたことは読み取れる。

フッサールの最大の目論見は、超越論的現象学による学問の基礎づけである。これは彼が哲学研究を始めたころから一貫して持たれた目的である。本稿が目指したことは、これを覆すことではない。

従来、学問と超越論的現象学の関係の中で、「生活世界の存在論」は「超越論的現象学への手引き」という位置づけをされてきた。それは『危機』書の中で、フッサール自身が述べていることであるし、また彼自身が「生活世界の存在論」よりも超越論的現象学の議論を優先したためでもある。

しかし実は、「生活世界の存在論」には、学問の基礎づけという現象学のプログラムの中で、ある目的を与えられており、それは「学問の統一性の回復」という目的であった。そしてこの目的は『危機』書の全体構想の中に組み込まれていた。これらが本稿の示したかったことである。今後は、「生活世界の存在論」のより具体的なあり方などを課題としていきたい。

参考文献表

1. フッサールの著作 1. Husserliana

Bd. III Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie.

Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie hrsg. von W. Biemel 1950 (渡辺二郎訳『イデーン I』全2冊 (I-1、II-2), みすず書房, 1979, 1984)

Bd. VI Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, hrsg. von W. Biemel, 1954 (細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社, 1974)

Bd. XXIX: Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Ergänzungsband Texte aus dem Nachlass 1934–1937, hrsg. von R. N.

7. 複数の「領域」は、『イデーン II』では、具体的に三つの領域が考えられている。この三つの領域の関係については、古くから議論が行われている。そうした議論から、「領域」と「生活世界」の重なりを見出すことは可能であるし、また「生活世界」という語は『イデーン II』で初出していることも、重なりを示すものだろう。ただ『危機』書では「学問の統一性の回復」という目的を読み取ることができる。本稿では、この点を重視するため、複数の「領域」と唯一の「生活世界」という対比的な側面を強調している。

Smid, 1993

2. フッサール以外の著作

- ・アルフレッド・シュッツ著, I・シュッツ編 ; 渡部光, 那須壽, 西原和久訳「フッサール後期哲学における類型と形相」『現象学的哲学の探究』マルジユ社, 1998, 所収
- ・ガリレオ・ガリレイ著, 山田慶兒, 谷泰訳『偽金鑑識官』中央公論社, 2009年
- ・クレスゲス著「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」(新田義弘, 小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房, 1978, 所収)
- ・R. ベルネ, I. ケルン, E. マールバッハ著, 千田義光・鈴木琢真・徳永哲郎訳『フッサールの思想』哲書房, 1994
- ・L. ラントグレーベ著, 山崎庸佑, 甲斐博見, 高橋正和訳『現象学の道』木鐸社, 1980
- ・板垣良一「アインシュタインとマイケルソンの実験 京都帝国大学演説をめぐって」『科学史研究』38, 173-177頁(日本科学史学会, 1999)
- ・榊原哲也著『フッサール現象学の生成 方法の成立と展開』東京大学出版会, 2009
- ・高橋哲哉著『逆光のロゴス 現代哲学のコンテクスト』未来社, 1992
- ・谷徹著『意識の自然 現象学の可能性を拓く』勁草書房, 1998
- ・浜渦辰二著『フッサール間主観性の現象学』創文社, 1995
- ・渡辺二郎著「『危機』と『イデー I』とを結ぶもの」(立松弘孝編『フッサール現象学』勁草書房, 1986, 所収)